

石川県立美術館開館35周年・北國新聞創刊125周年・石川テレビ創立50周年記念

## 特別展 若冲と光瑠

～伊藤若冲とその画業に魅せられた石崎光瑠の世界～



重要文化財《仙人掌群鶏図襖》 伊藤若冲、大阪・西福寺蔵  
「若冲と光瑠」より

■ ○△□ 幾何学のデザイン

■ 前田家 武の装いⅡ

■ 琳派

■ 新収蔵品展【近現代絵画・彫刻】

■ 優品選 初夏の彩り【近現代絵画・彫刻】

- 企画展Topics URUSHI 伝統と革新
- 7月のおすすめ展覧会・行事予定
- 展覧会回顧 美の力
- 展覧会回顧 静謐なる世界—日本画家 仁志出龍司—
- アラカルト ただいま展示中



小森邦衛 《網代重箱「暁天」》  
「○△□ 幾何学のデザイン」より

## 第7・8・9展示室

石川県立美術館開館35周年・北國新聞創刊125周年・石川テレビ創立50周年記念

# 若冲と光瑤 ～伊藤若冲とその画業に魅せられた石崎光瑤の世界～

主催：石川県立美術館・北國新聞社・石川テレビ放送 特別協力：南砺市立福光美術館、細見美術館

6月23日(土)～7月22日(日) 会期中無休

石川県立美術館開館三十五周年と、北國新聞創刊一二五周年、石川テレビ創立五十周年を記念して開催するもので、江戸時代の絵師・伊藤若冲とその画業に魅せられた南砺市出身の花鳥画家・石崎光瑤の世界を五十二点の作品を通して紹介します。

伊藤若冲は京都錦小路の青物問屋の長男として、正徳六(一七一六)年に生まれました。家業のかたわら狩野派、尾形光琳や中国の元代、明代の画法を学び、四十歳で家業を弟に譲って、絵画の制作に専念しました。そして寛政十二(一八〇〇)年に没するまで、精力的に制作を続けました。身近に存在する画題をじっくり観察し、精緻でユーモラスな生命力あふれた表現はいつの時代も多くの人を惹きつけてやみません。展示では、晩年の傑作《仙人掌群鶏図襖》(重要文化財、大阪・西福寺蔵)などを公開します。

この《仙人掌群鶏図》をいち早く「発見」したのが、金沢で絵画を学び、京都画壇で活躍した石崎光瑤です。若冲に憧れ、研究を進めていた光瑤は大正十四(一九二五)年、西福寺で若冲の作品を確認し、世に伝えました。若冲についての寄稿を発表するなど、今日の若冲再発見の先駆けとしての業績を残します。

この他、近年、石川県で発見された若冲のユーモラスな画風を伝える《象と鯨図屏風》(MIHOMUS EUM蔵)、南国の動植物を描いた光瑤の代表作《熱国妍春》(京都国立近代美術館蔵)等が展示されます。近世と近代を代表する二人の絵画世界を、どうぞお楽しみください。

### ◆記念講演会

六月二十四日(日)

「若冲を支えた人々―売茶翁などなど―」

講師：狩野博幸氏(美術史家)

七月七日(土)

「色からみた若冲」

講師：安村敏信氏(北斎館館長)

七月十四日(土)

「至高の花鳥画を求めて」

石崎光瑤―その生涯と画業―

講師：渡邊一美氏(南砺市立福光美術館副館長)

いずれも午後一時三十分より。

聴講は無料ですが、展覧会入場券の半券を提示ください。

### ◆観覧料

	一般	中学生	小学生
個人	一、二〇〇円	八〇〇円	六〇〇円
団体 (二十名以上)	九〇〇円	五〇〇円	三〇〇円

※県立美術館友の会会員は団体料金。

### ◆お問い合わせ(平日10時～18時)

北國新聞社事業部

電話 〇七六一二六〇一三五八一

石川テレビ放送事業部

電話 〇七六一二六七一六四八三



石崎光瑤 《熱国妍春》京都国立近代美術館蔵



## 琳派

6月22日(金)～7月23日(月) 会期中無休

## 前田家 武の装いⅡ

6月22日(金)～7月23日(月) 会期中無休

当館の展示でご覧いただける加賀藩歴代藩主所用の甲冑・陣羽織は、状態が比較的良好なものを選んであります。甲冑を構成する緘あじは革や糸でできていますが、二百年から三百年も経過すれば、劣化が進みます。そのために全体を展示することが困難となる場合もしばしばあります。そこでこれまでの展示では、胴のみ、あるいは兜のみを展示したこともありまして。近年は、展示による劣化を軽減する意味から《軍装図録》を活用しています。

一八〇五年に作成されたこの図録は、「百工比照」の精神を踏襲したもので、色や形状が忠実に記録されていることから、加賀藩歴代藩主の「武の装い」の傾向がよくわかります。そして前田家の場合は、外見

のみならず素材も入念に吟味されているようです。

《軍装図録》には具体的な素材や内側の装飾などは詳細に記述されていませんが、特に甲冑には当時最先端の化学工業の成果が投入されているように思われます。この点は、今後入念に資料の調査を行うことで徐々に明らかになることが期待されます。このように、戦略的な文化振興政策を展開した加賀藩主・前田家の武具には様々な意図がこめられています。これも、外様大名としての存亡をかけたサバイバル戦略の一環として解釈することができるのではないのでしょうか。

先般好評のうちに終了した「美の力」展では俵屋宗達を、千利休の養嗣子で千家を再興した千少庵を茶会に招くほどの高度な茶の湯のたしなみがあった人物として、また金沢で没したとの伝承もあり、当地に名作が多く伝来した画家として「加賀の文化的求心力」の章で取り上げました。同様に宗達の後に俵屋を継承した宗雪も、加賀藩三代藩主・前田利常が狩野派を見据えてバックアップした画家として宗達と、続く狩野探幽と久隅守景の名作群の中間に取り上げました。

そのため今回の特集では、宗雪の後継者となった喜多川相説にスポットを当てました。相説については、伝記的な事実はほとんど知られていません。この点は宗達、宗雪と同様ですが、伝存する作品からやはり法

橋に叙任され、また画家として七十歳を超えるまで活動していたことが確認されます。また、尾形光琳の《夏秋草図》をはじめ、草花を題材とした光琳作品の構図や描写には相説からの明白な影響が認められます。そして京都・頂妙寺の墓などから、相説の喜多川姓は宗達とも関係が深いとみられることから、宗達が遺した画稿類が宗雪をへて相説に相続され、相説によって光琳に示されたと推測することもできます。

したがって、相説も京都と金沢を往復しながら制作にあたったのではないのでしょうか。相説の時代の加賀藩主は五代・前田綱紀と考えると間違いないでしょう。そうすると、博物学を实践した藩主のもとで《秋草図》(県文)のような作品が誕生した経緯もわかります。



県文《秋草図》 喜多川相説、右隻部分

《軍装図録》部分

## 優品選 初夏の彩り

6月22日(金)～7月23日(月) 会期中無休

優品選は「初夏の彩り」と題した展示です。日本画部門では、企画展示室で開催中の「若冲と光瑠」にちなみ、京都画壇で活躍した、木島櫻谷や橋本閑雪の作品をご覧頂くほか、初夏を彩る作品を展示します。《気》の作者稲元実は、岩絵具の特性を写実表現に生かすことでは、有数の日本画家であり、本作も気品と生気に満ちています。

油絵部門は、前号で夏の季節を描いた風景作品を紹介しましたが、今回は夏を感じさせる人物画や静物画を紹介します。高光一也の《二人(壺を持つ女)》は、裸婦の大らかな肉体が逞しい線で描かれ、夏の海辺と乾いた空気を感ぜさせます。前田さなみの《休日(の肖像南風)》は、つなぎのジーンズを着た裸婦が公園の木陰に身を隠すという、幾分シニールな画面です。

が、葉や裸婦に射す光は夏の日差しそのものと言えます。この他、立見榮男の《雷神》や増田孝の《初夏の人影》、山岸光代の《甦る夏》等をご覧いただきます。

彫刻部門では、木彫を中心にご覧いただきます。書間弘《朝》は、初夏の早朝を思わせる瑞々しい作品です。美術において、生命の再生や清新を予感させる「朝」は欠かすことのできないテーマであり、当館所蔵品にも題名に「朝」がつく作品は七十二点もあります。

版画では、木口木版のバイオニア、日和崎尊夫の代表作《KALPA》《海淵の薔薇》のシリーズからの作品、そして、その日和崎に触発され、木口木版画を志した栗田政裕、小林敬生の作品も展示いたします。



稲元実 《気》

## 新収蔵品展

6月22日(金)～7月23日(月) 会期中無休

日本画部門では寄託されていた岸浪柳溪の《富士に群鶴図》が、収蔵されることになりました。岸浪柳溪は、田崎草雲に学び南画家に列する画家ですが、作画の特徴は、南画家には似つかわしくない卓越した精緻な描写力にあります。本作もその画風を遺憾なく発揮した八曲一双の秀作です。

洋画部門では三点の油彩画が新収蔵となりました。作品は、小糸源太郎《猫の居る静物》と《春光》、そして中村静男《月光譚(新月)》です。

小糸は東京美術学校金工科に学び、初期に細密描写の静物で高い評価を得ました。《猫の居る静物》は十一年の第二十三回光風会展出品作で、中期の代表作の一つです。自身大変気に入り、終生アトリエにかけ手放すことはありませんでした。大らかで勢いのあるタッチが魅力的な作品です。一方《春光》は昭和五十三年の制作で、吉野の桜の満開時が描かれてい

ます。時間は昼を過ぎた頃でしょうか、あたたかく柔らかな陽光に包まれた夢幻の世界が描かれています。小糸の絶筆となった作品です。

中村の《月光譚(新月)》は人の暗喩であるマネキンが、生命を象徴する緑豊かな植物と対比されています。バックは田圃と山並みに新聞の帯が広がっています。刻々と変動する人の営みや世界の事象を伝えるものでしょう。テーブルの上のホルンは、山の端の曙とともに、新たな一日の始まりを告げています。

彫刻部門の梶本良衛《今のワ・タ・シ》は、杉材を寄せ木によって腕や脚を繋げ、大型化した作品です。接続部と凸部を中心に、黒・赤漆を塗り、梶本作品の特徴を表しています。胴部には粗く鑿跡を残すとともに、腹部を断裂のように彫り込み、平坦になりがちなるフォルムに充分な変化を与えています。新たに収蔵された優品をお楽しみください。



小糸源太郎 《猫の居る静物》

# URUSHI 伝統と革新

9月15日(土)～10月14日(日) 会期中無休

人間国宝とは正式な名称ではなく、重要無形文化財保持者の通称であることは、ご存知の方も多いでしょう。歴史上あるいは芸術上価値の高い技術を重要無形文化財に選定し、その保持者を認定する現在の制度は、昭和二十九年に改正されたものですが、工芸技術や芸能といった「形のない」文化財の保護が初めて明文化されたのは、同二十五年に制定された文化財保護法でした。

これは前年の法隆寺金堂の火災がきっかけで、国による文化財保護を急務として制定された法律です。寺社建築や美術工芸などの有形文化財の保護のみならず、戦中戦後の混乱で指導者も後継者も減り、危機に瀕していた貴重なわざを後世に遺すための施策も行われました。二十七年から二十九年の間に五回、

計五十六件の工芸技術が「助成の措置を講ずべき無形文化財」に選定され、石川県関係の漆芸作家の中では、二十九年に改正された文化財保護法で、人間国宝に認定された松田権六や前大峰が技術記録を制作しています。

秋季企画展「URUSHI 伝統と革新」は、明治期の名工から活躍中の若手まで、近代漆芸史をたどる展覧会です。日本工芸会漆芸部会が行う、日本伝統漆芸展の三十五回記念として、貴重な名品を展示します。今回「助成の措置を講ずべき無形文化財」に選定された技術記録の内、後の人間国宝・高野松山による蒔絵の工程見本を展示します。八種の蒔絵技法を、手板五枚から十数枚の工程で紹介したもので、高野の本制作と併せてご覧いただけます。



高野松山 《蒔絵技術記録》(文化庁蔵) 部分

# ○△□ 幾何学のデザイン

6月22日(金)～7月23日(月) 会期中無休

第五展示室の近現代工芸部門では、幾何学のデザインに注目した展示を行っています。今回はその中から何点か紹介します。

表紙で紹介した小森邦衛《網代重箱「暁天」》は、技術的な工程の過程で幾何学的な模様が生まれた作品です。形体は六角形の三段重箱で、竹を細く裂いたものを編んで表面に貼り、その上から編み目の凹凸が均一に残るように漆を塗っています。光を当てると漆塗の朱から黒へのグラデーションが相まって、竹で編んだ蓋の格子模様や側面の網代編み模様が浮かび上がり、六角の形の美しさが際立ちます。重要無形文化財「髹漆」保持者である、小森の巧みな塗りの技術があつてこそその意匠構成と言えるでしょう。

金森映井賀《象嵌銅花瓶》は、第三十二回日本伝

統工芸展で保持者選賞を受賞した作品です。側面に施された、さまざまな色の合金による幾何学模様の象嵌は、銅による重厚な形体に軽快さを加え、金属という素材の多様さを生かした金森独自の世界を築いています。

赤絵細描の名工・福島武山の《赤絵壺「かざはな」》は、極めて細かく精緻な小紋の曲線と直線の構成によって、半円を四つ組み合わせた風車にも、石畳模様にも見える意匠が見事です。また福島に師事した見附正康の《赤絵花盃「diaper」》は、直線的な形と数学的な文様が織りなす、赤絵細描の新しい姿を提示しました。

素材と技術が調和した、工芸作品における幾何学のデザインをお楽しみください。



福島武山 《赤絵壺「かざはな」

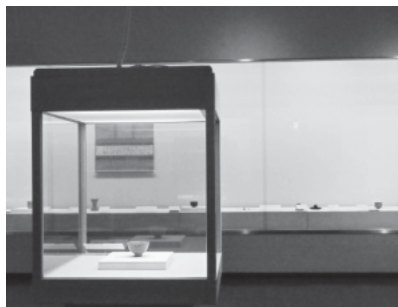
## 展覧会回顧 美の力

4月21日(土)～5月20日(日)

本展は当館開館三十五周年と、金沢美術倶楽部の創立百周年を記念して開催されました。一九五九年に開館した旧・石川県美術館以来、県立美術館の企画展や収蔵品の充実は金沢美術倶楽部の協力が多くを負っており、今回の協働はその集大成と位置付けられます。

地方の公立美術館の重要な社会的使命は、その地の文化的アイデンティティを展覧会などの事業をとおして具体化し、発信することであることを考えますと、「千利休の生き様が、加賀百万石を動かした。―秘蔵の逸品 奇跡の邂逅―」とのキャッチコピーは本展に相応しいものだったと思います。そして三年前に、利休の生き様が象徴するといっても過言ではない長次郎作の《黒楽茶碗 銘北野》が当館に寄贈されたことも重く受け止め、本展のコンセプトと展示構成は、利休と加賀の地を軸に、室町時代の唐物荘厳から現代に至る歴史的展開をたどることを主眼としました。

国立博物館の大規模な展覧会や、家元の交代などにより「ドリムリスト」の現実化は厳しい状況でしたが、その中でもたとえば狩野探幽筆の《笛吹地蔵図》のように、これまで展覧会に出品されたことが一度もない歴史的名品を多く展示することができたことは大きな喜びでした。またMIHOMUSEUMと根津美術館が所蔵する前田家伝来の「曜変天目」二口、さらに五島美術館の「破袋」と北陸大学の「破家」をそれぞれ並べて展示し、その空間に「筒井筒」と「北野」を対置するなど、誇張なしに「百年に一度の出会い」も実現できました。入場者数は目標を大きく上回る一万二千人となり、図録も完売となりましたことのご報告とともに、本展開催にご協力賜りました関係各位に改めて厚く御礼申し上げます。



## 展覧会回顧 静謐なる世界 ―日本画家 仁志出龍司―

4月20日(金)～5月20日(日)

多くのご来館をいただき、好評を博しました特別陳列「静謐なる世界―日本画家 仁志出龍司―」はまた、こだわりの世界でもありました。まず美術館で通常設けている上限の照度を大幅に超えた明るい展示照明は、作家のつよいこだわりによるものでした。「僕の絵はとにかく明るく。スポットは要らない」と。たしかに色温度の低いスポットライトより、ウォールウォッシュャーの方が、岩絵具の粒子に、より鮮やかで冴えた光彩を与えました。また、若き日に工房で多くの図案を手がけていた友禅作品の展示にもこだわりが。波に鶴の琳派風意匠が映えた友禅黒留袖《千鶴》では「実際に着用したときと同じ高さで展示を」との要望にはお応えできましたが、次に「着用したときに最も目立つ上前を飛ばす鶴が見えるように」とハードルの高い要求が出されました。工芸スタッフの知恵を借りてなんとかお応えできました。《千鶴》とはご母堂の名前であり、ご母堂のためにデザインされた留袖だったと後から知り、得心した次第です。

そのようなこだわりは、破綻や逡巡のない完結した作画に帰結したといえ、氏の中にある明確なテーマとイメージが、筆と絵具を媒体に余すところなく表現されたのです。それだけでなく、随所にあるよく見ないとわからない小さな仕掛けも魅力です。たとえば《帰航》に描かれた船の名が「英雄丸」となっていたことに気づいたでしょうか。英雄とは師西山英雄のことであり、本作は師が亡くなった年の制作でした。その他小動物が生息している様子や痕跡をそっと描き込むなど、実物を鑑賞することの楽しさを教えてくれた展覧会でもありました。



## 7月のおすすめ展覧会

### 【東京】

「うるしの彩り 漆黒と金銀が織りなす美の世界」

六月二日(土)～七月十六日(月・祝)

泉屋博古館分館 東京都港区六本木一―五―一

電話：〇三―五七七七―八六〇〇(ハローダイヤル)

「明治一五〇年記念 明治からの贈り物」

七月十六日(月・祝)～九月二日(日)

静嘉堂文庫美術館 東京都世田谷区岡本二―二―三―一

電話：〇三―五七七七―八六〇〇(ハローダイヤル)

### 【関西】

「糸のみほとけ―国宝 綴織富麻曼奈羅と繡仏―」

七月十四日(土)～八月二十六日(日)

奈良国立博物館 奈良県奈良市登大寺町五〇

電話：〇五〇―五五四二―八六〇〇(ハローダイヤル)

「大和文華館の日本漆工―特別出陳：酒井抱二下絵・原羊遊斎作 時絵作品―」

七月六日(金)～八月十九日(日)

大和文華館 奈良県奈良市学園南一―一―一―六

電話：〇七四二―四五一―〇五四四

### 【東海】

「知られざる古代の名陶 猿投窯」

六月三十日(土)～八月二十六日(日)

愛知県陶磁美術館 愛知県瀬戸市南山口町二三三四

電話：〇五六―一八四―七四七四

## 7月の行事予定

### ◆キッズ・プログラム

「アートゲーム大作戦」

日時 七月一日(日) 午後一時三十分～三時(午後一時より受付開始)

内容 展示室で、ゲームの要素を取り入れた楽しい美術鑑賞を体験します。

対象 小学生親子、定員三十人

「アートde動物 大集合！クイズ・これだあれ？」

日時 七月二十九日(日) 午後一時三十分～三時(午後一時より受付開始)

内容 自分の好きな作品のクイズを作り、そのクイズでゲームを楽しみます。

対象 小学生親子、定員三十人

いずれも予約不要

子ども一名に対して保護者二名まで観覧料無料

■土曜講座		午後1時30分～ 美術館講義室	聴講無料
21日(土)	「耕織図」の楽しみ ―近世日本絵画を中心に―	有賀	茜

## お詫びと訂正

前号の美術館だよりに誤記がありましたので、お詫びして訂正いたします。

6ページの収蔵作品合計数は、

正しくは三八八二点(平成三十年三月三十一日現在)です。

《KALPA 69》 かるば69

縦24.7cm 横22.3cm 昭和44年(1969)

日和崎 尊夫 ひわさき・たかお

昭和16年～平成4年(1941-1992)



木版画というと、柀目の板に刀を当てて板面を彫る板目木版を想像する方が多いのではないのでしょうか。この作品は、黄楊や椿などの堅い木を輪切りにした版木を使い、銅版画で用いられるビュランで版木を彫っていく木口木版です。木口木版は十九世紀の西欧で隆盛し、精密で微細な表現が可能なため、主に書物の挿絵として用いられました。日本でも明治の中頃には新聞、雑誌、教科書などの挿絵に多用されましたが、写真製版の進歩とともに廃れていきました。この作品の作者、日和崎尊夫はその木口木版を独学で蘇らせ、印刷手段としての実用から離れ、技法の特性を生かした独自の表現技法として高めました。日和崎の

作品に触発され、この技法を使う版画家が幾人も生まれたことから、その存在の大きさが窺えます。この「KALPA(カルパ)」の連作は、輪切りにした椿をそのまま版木として用い、漆黒の切り口から生まれた花々の姿を写し取ったかのような作品群です。精神的に不安定になっていた日和崎は、一九六七年頃に法華経の想像も計算も超越した極めて長い期間という漠然とした概念、カルパから啓示を受け、自然と合一していくような安定した心の状態になったといえます。素材になる椿の芯になる部分に自分を投影して、ビュランによって形を彫り込んでいった日和崎は、五十歳でその命を閉じました。

次回の展覧会

平成30年7月27日(金)  
～8月28日(火)

		前田育徳会 尊経閣文庫分館	第2展示室
		前田家の名宝	江戸の動物画優品選
第3・4展示室	第5展示室	第6展示室	1F企画展示室
優品選	水辺をたんけん!	アートde動物大集合!	生誕220年 広重展 7月27日(金) ～8月26日(日)

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 360円(290円)  
大学生 290円(230円)  
高校生以下 無料  
※( )内は団体料金  
毎月第1月曜日はコレクション  
展示室無料の日(7月は2日)

今月の開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後7:00 年中無休

7月の休館日は  
24日(火)～26日(木)

～遺品整理・骨董品の処分・蔵、空家の片付けをお考えの方～

骨董買取専科 にご相談下さい。

出張料(石川・富山・福井)見積り 無料

お問い合わせ



0120-86-3445

石川県金沢市福久町ヲ 119-1  
国道8号線福久南交差点角

高価買取



広告

石川県立美術館だより  
第417号(毎月発行)  
2018年7月1日発行

〒920-0963  
金沢市出羽町2番1号  
Tel: 076(231)7580  
Fax: 076(224)9550  
URL: <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>